

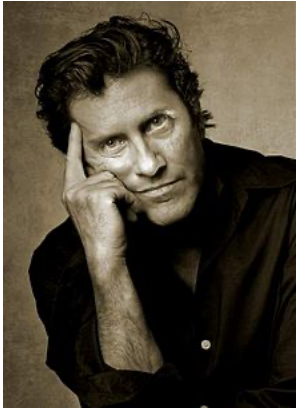
《マルセロ・フォン・シュワルツ》 映画監督、建築家、芸術写真家

彼の作品は物事の暗い側面に焦点を当てていることで知られています。20以上の映画/ビデオアートプロジェクトに取り組み、近年、バイノーラルビートの催眠特性を活かした長編映画「Dark Bridge Binaural Brainwaves」をリリースしました。彼の作品は、常に新しい課題と限界を模索しながら、さまざまなジャンルの組み合わせが反映されています。建築プロジェクトは未来的なソリューションに焦点を当て、映画では脳神経科学からのアイデアも取り入れた特殊な手法によって表現されています。また彼の写真は現実的には不可能な世界。現在、MC・エッシャーの作品世界を引き継ぐ人の1人と称されています。

《創造の旅》

マルセロ・フォン・シュワルツは、ブエノスアイレス大学で建築を学び、アルゼンチンで最も影響力のある映画製作者の1人であり、60年代のアルゼンチンヌーヴェルヴァグの前身であるデビッドホセコーンの下で映画製作を学びました。バルセロナでアートディレクター兼プロダクションデザイナーとしてさまざまなインディペンデント映画に携わった後、35mmネオエクスプレッションの短編映画「フェニックス」を制作。この映画は世界中の30以上の映画祭でいくつかの賞を受賞し、国際的に認められる存在となる。2014年に映画「Dark Bridge Binaural Brainwaves」を発表。これは彼の最初の長編映画で、全てバンコクで撮影。映画の音楽全体にシートバイノーラルブレインウェーブを導入して催眠的な要素を取り入れた手法は、新しいニューロシネマ運動の前兆である「新しい潜在意識の映画体験」への扉を開く最初の長編映画です。

近年、RECOIL Selected World Tour 2010-2011で、RECOIL (Alan Wilder、元キーボード奏者、Depeche Modeのソングライター)とのビジュアルコラボレーションや、2022年にアジアで撮影予定のVRスリラー3D映画プロジェクトが進行中。



《永井朋生》 パーカッショニスト、作曲家

1975年静岡生まれ。東京芸術大学大学院修了。

世界各地で出会った素材から音を見つけ、独自のコンセプトに基づいて国内外での演奏、作曲活動を行う。インドネシア、ブラジルサンパウロ、フランス、モロッコ、アイスランド、リトアニアなどの国外ツアーにて多くのフェスティバルへ参加。世界文化遺産三保松原の三保松原文化創造センター(みほしるべ)の館内音楽「オトノキ」、和歌山県白浜の南方熊楠記念館、館内音楽「南方熊楠音楽」、同県JRきのくに線の31駅のホームの音楽「Sounds for 31 Stations」、東京都品川区にあるオフィスビル=天王洲セントラルタワー内の音楽「Sounds for TENNOZ CENTRAL TOWER」など、公共施設の音楽デザインを作曲。また日本遺産の八王子「桑都物語」導入動画、日本遺産鳥取のプロモーション動画の作曲などを行う。

ブラジルのテアトルユバ、静岡SPACや劇団ひまわりの舞台音楽、映画「ほとく」や「たまご」等の音楽を担当。NHKスペシャル「人類誕生」やテレビ番組「イアリー」、角川映画「世界でいちばんあかるい屋根」の音楽への参加、NIKE LAB RADIO「夢の処方箋」音楽担当。2013年フランスC.C.F.J.Tよりソロアルバム「5 1 4 Pictures」、その他アルバム多数発表。

